

ジョン・キーツ研究

—「美的なるもの」を求めて—

相 島 倫 嘉

キーツの「美」と「真」

カントは「判断力批判」(Kritik der Urteilkraft)の第四節で、「およそ美の学なるもの(即ち美学)はありえず、ただその批判があるにすぎぬ。同時にまた、美なる学というものはありえず、ただ美なる芸術があるにすぎない。」と述べている。「学なるもの」の第一の特徴は、恐らく論証根拠(Beweisgrund)を持つことであろう。上のカントの提言は、この特徴と関連する。即ち、もし美の学なるものがあるとするなら、あるものが美しいか否かは、論拠を示すことにより解明されるはずである。従って、カントにおいては、われわれが日常の経験からする個人的趣味的判断(これはカント自身の用語)は許されないことになる。だが美的価値あるものとして体験される対象は、「私」の意識を超越して外にあるものではない。認識対象が *an sich seiend* (それ自体において存在する) のを特徴とするのに対して、美的対象の特質が *für uns seiend* (われわれに対して存在すること) であるゆえんである。Beweisgrund をもたぬことが、「美学」という「学」の特質といってもさしつかえない。

B. J. Evans は、そのキーツ論⁽¹⁾の中で、キーツのなかに哲学者を求めることを警戒し、J. M. Murryの“Keats and Shakespeare”(1925)や、C. D. Thorpeの“The Mind of Keats”(1926)のような研究書のもつ危険性を指摘している。詩人のなかに哲学者を求めることで、詩人がわれわれに与えるイメージが偽りのものとなる場合があるというのである。キーツ自身、観念による哲学的論証的思考を大変嫌い、それ以前の神

話の中に、プリミティヴに存在する、イメージによる思考、すなわち、イマジネーションの働きにより本質を直観する方法を見い出すに到った。従ってキーツの美学は、膨大な書簡と、一つ一つの作品を読んでゆく中で浮び上がってくるものであり、それを系統だてることもかなり困難なことである。若い頃、キーツの影響をうけた西脇順三郎の詩作や生き方には、共通するものが少なくなく、その解明にはかなり困難をとまなうのは同様であるが、西脇には「詩学」その他、かなり系統だった持論があり、われわれは作者の証言をじかにきくことが出来る。この点、キーツの手がかりは書簡集であるが、それはすべてキーツの思想の断片であるにすぎない。

Mathew Arnold⁽²⁾ は、「事物を美の姿で眺めることは、事物を真の姿で眺めることであり、キーツはこれを知っていた。」(To see things in their beauty is to see things in their truth, and Keats knew it.) という。これは、あの有名な

‘Beauty is truth, truth beauty,’—that is all

Ye know on earth, and ye need to know

「美は真にして、真は美なり」と。これぞ

世の人の知りてあり、はた知るべき全てなり。

という一節に関連してアーノルドの述べたことばなのだが、何か曖昧な表現である。この近代最初の、最も偉大な批評家の一人である彼が、“To see things in their beauty” ということばで、一体キーツの考えていたことが何なのかを、もう少し詳解してくれたらと思わざるをえない。私はこの点に期待し、原著の文全体から、この「美」ということばの規定が少しでも明確になるかも知れぬと思って、全訳し雑誌「研究」に掲載した。だが、十分な結果は得られぬままだった。これを知ることこそ、恐らくキーツの芸術哲学への key を握り、その作品解明への道をひらくものであろう。何故なら、「美」こそ、若きキーツが、たえず目指し、求めて、情熱を傾けたものだったからである。

Richard Woodhouse にむかってキーツは明言する。⁽³⁾「たとえ、毎夜の労作が、毎朝焼き捨てられ、誰一人としてそれらをみてくれなくとも、私は美に対する憧れと愛着をもって、書くべきだと確信しています。」

(*I feel assured I should write from the mere yearning and fondness I have for the Beautiful even if my night's labours should be burnt every morning and no eye ever shine upon them.*)

キーツは美への情熱を持ちつづけることにより、自分と poetic genius とが通じ合えると考えていた。美は、彼にとって、一つの直感力であり、真理であった。世を去る寸前、恋人の Fanny Brawne にあてた手紙⁽⁴⁾にこう書いている。

「私が死んでも、何ら不滅の作品を残すことにはならないだろう——友人たちが、私についての思い出を誇るようなものは何も。だがあらゆるものの中に存在する美の原理を、私は愛して来たし、十分に時間があれば、人々の記憶に残ることも出来ただろうに。」(If I should die, I have left no immortal work behind me——nothing to make my friends proud of my memory——but I have lov'd the principle of beauty in all things, and if I had time I would have made myself remembered.)

キーツにとって「美」は、単なる詩的宇宙や詩的真実を解く鍵であったばかりか「真実」そのものであったと言ってよい。即ち「想像力が美として捉えたものは真実である。たとえそれが、以前に存在していたものであられなけれ。」(What the Imagination seizes as Beauty must be truth, whether it existed before or not.) であった。

想像力を通して物を把握する方法は、理論や科学的研究とは対蹠的に、感情を通じての直覚的方法とよぶことが出来る。この場合、精神が想像力を通して、直接的に感じとった精神的実在を「美」とよぶのである。また

「美」として訴えるほどの *intensity* を持つものは、同時に「真」であった。キーツが、単なる感覚美の詩人であると非難する人が今もあるが、上のような美の言及は、およそ感覚的領域とは別世界といってよい、永遠普遍の真実を指していることに注目しなければならない。ここでは、一種の「思想」にまで高められているのである。

このような美は、受動的に知覚されるにとどまらず、イマジネーションの働きによって創造もされ得るという見方をキーツは生涯持ちつづけた。これを明確に述べたのは1817年のことであるが、19年5月に、“Beauty is truth, Truth beauty,” と高らかに宣言した時も、相変らずこの信念に基いたものである。キーツは空想力と想像力をはっきりと区別している。空想力とは若人のよくふける夢の世界であり、感傷的で教養の裏付けを欠く。一方想像力とは、まず人間世界と親密な関係を長くつづけ、その中で鍛えられ、より高いものへと育てあげることが出来る。両者は表面上酷似するが、前者がひどくセンチメンタルで、非現実性をおびる幻影であるのに対し、後者は高い真実の啓示へと達し得るのであるという。C. D. Thorpe⁽⁵⁾ は、この点について、「もしキーツがもっとあとになって “Ode On A Grecian Urn” を書いていたなら、“What the *wise* Imagination seizes as Beauty must be truth.” といっただろう。」とおもしろい書き方をしている。換言すれば、「美」とは、知的に訓練された想像力の直観を通して到達された「真実」ということが出来る。

芸術作品との関連で考えるなら、「美」は、そこにあらわれた事物或は表現を、感覚を通して認識することであり、この意味での「美」は、確かに真実の本髄であり、時間、空間、道徳などの制限をこえて存在する。これは、主観的で、自由で、永遠につづく宇宙の不朽の真理だという。キーツがどれほど想像力を駆使する本質把握に信頼を置いていたかを示す例として次の引用を示すことで、この項を終ることにする。

「私は人間の愛情の尊さと想像力の真実を確信します。想像力が美として捉えたものは真でなければなりません。（中略）想像力は、譬えばアダム

の夢のようなものです。アダムは目覚めて、夢の真実を悟りました。私はこの問題には熱心なのです。何故かといえば、一貫した論理でもって真実と知れたことがありうるか——そのような必然はあるとしても——そのわけが私には分らないからです。」(I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination—What the imagination seizes us Beauty must be truth.—The Imagination may be compared to Adam's dream—he woke and found it truth. I am the more zealous in this affair, because I have never yet been able to perceive how anything can be known for truth by consequitive reasoning.)

キーツと美術作品への反応

ヴィンケルマンがはじめてギリシヤ美術に接した時、彼の興味はもっぱら「形」に集中された。フィディアスやプラクシテレスなどの芸術家たちの諸作における特徴として、彼を最も引きつけたのは、均整と調和と美しい線美であった。肉体の美しさこそ第一で、表現方法といったことは二の次であった。それゆえ、1764年に「古代美術史」の名の下に大成されたギリシヤ美術批評においても、その中心は形象美を論ずることにおかれている。このヴィンケルマンの態度とキーツのそれを比較することは大層興味深く、かつ有益なことであると考ええる。

The Elgin Marbles と名付けられた、パルテノン神殿の彫塑装飾の大部分を含む、主としてフィディアス派の大理石彫刻群がある。これらの人物群がアテネから運ばれ、大英博物館に納められるについては、キーツの友人ヘイドンの努力が大きかったために、彼も早くからこの作品に注目していた。この結果、The Elgin Marbles をうたった二つの sonnet が生まれることになる。その一つを次に引こう。

On Seeing The Elgin Marbles

My spirit is too weak ; mortality

Weighs heavily on me like unwilling sleep,
And each imagined pinnacle and steep
Of godlike hardship tells me I must die
Like a sick eagle looking at the sky.

Yet 'tis a gentle luxury to weep,
That I have not the cloudy wings to keep
Fresh for the opening of the morning's eye.
Such dim-conceived glories of the brain

Bring round the heart an indescribable feud ;
So do these wonders a most dizzy pain,
That mingles Grecian grandeur with the rude
Wasting of old Time—with a billowy main
A sun, a shadow of a magnitude.

偉大な芸術作品に接した体験の直接的表現であるこのソネットを証言とするならば、ギリシャ彫刻に接しても、形象美などキーツに訴えるところは殆んどなかったようである。このソネットはどうみてもよい出来とは思えず、彫刻の与えた印象なども明確には表現されていない。Thorpe は、キーツの頭脳に一度に多くの像が乱れ入り、それらに圧倒されてしまったのだという。更には、真の芸術作品の名に値する作品の前にあって、一種の病的な恐怖感を抱き、詩という芸術で成功を納めようという年来の望みが、果しなく遠いもののように思われたのだらうという。この詩を詳しくエクスピリカシオンしたならば、キーツの心を動かしたのは、単なる大理石像群の外見の美しさではなく、芸術作品のより深い意味、即ち、作品が感情に働きかける力とか、その生み出す真実味が如何ということであることが分る。キーツの興奮しきった脳裡を去来したのは、長い年月にわたる人類の進歩のことであり、文明の興亡のことであり、人間やこの世のもつ意味のことではなかったらうか。先述の通り、このソネットは最高の出来ではないが、キーツの「美」の特質を知るにはまたとない材料の一つであ

ることは確かであろう。まず大理石像が観賞者の想像力を捉える。そしてその観賞者の心の中に、これらを最初に作った芸術家が、最初に把み、このような像へと作りあげたと同質の「生命」を呼び起す力があるとすれば、それがこの観賞者にとって「美」を把握した瞬間であり、形式と内容が一致し、美と真が具現する瞬間なのである。「ギリシヤの古甕」の場合もまったく同様である。観賞者の独自の想像力が、この甕に表現された作者の想像力と同一点に到達したのである。単に外形が美しいだけでは関心さえも示さない。キーツを捉えたのは、この古甕に表現された象徴である。象徴とはこれ自体が精神活動の所産であり、その中にはダイナミックなものを含み、想像力の捉えた一種の洞察ともいえる。これこそが真の芸術であり、美であり、長い年月に耐える形の中に保たれた真実である。このオードは、先ず、古甕の表面にあらわれた場面の描写ではじまる。そのあと、これに関連して、キーツの思索の跡を述べる。キーツにとってこの古甕は強力なレンズである。これを通して、つねに「現在」という形に固定される過去のスペクタクルをみることが出来る。ここには、知覚し、解釈し、更にそれを作品に固定させるという芸術家の使命の、小さいながら真実の一部が記されていると思う。キーツの心には、美しく彫刻された形象から飛び出し、彼の想像力を捉え、燃え上がらせる直感的語りかけが感じられた。そのあとに現われる強烈な思索の中に真実を発見する。これは事実として感じたのでも、論理的結論としてでも、人生訓としてでもなく、宗教思想でもない。むしろ、実存の原理が啓示されたのであり、人生の法則が知覚されたのであり、普遍的な人間の心への洞察がなされたのだと考えるべきである。このように、キーツは *emotion* を通して想像上に行なう知覚により到達される真実が美であり、美は真実となるのである。美は、いわゆる *things beautiful* のみを指すのでないことは美学上の常識である。バウムガルテン (Alexauder G. Baumgarten) が哲学の一部門として美学を位置づけ、それに固有の対象領域をふり分け、その名を *Aesthetik* と名づけたのは1750年のことである。彼は美学を *Aethetica est scientia cognitionis scientirae* ——「美学」は感性的認識の学である——と定義

した。Aethetica ということばは、元来ギリシヤ語の *αἰσθητικόν* (知覚する), *αἰσθητός* (感覚的) に由来するのであるから、その領域が一般に「美しい」もの以外に及ぶのも当然である。キーツのいう美の概念も、人生の美しきもの、快なるものばかりではなく、醜なるもの、悲劇的なものまでその範疇に含む、ごく広い範囲である。キーツは現実と夢の世界の調和を試みることにより、自然の容赦なき残酷さや、人間の偽善に満ち、卑しい行動に対し、少しでも気持ちのよい態度で接することが出来る一手段だと考えていた。それ故に、彼の場合は、どのようなものに対しても反撥という形でなく、思索という型で終ることになる訳である。

キーツは、当時王立美術院々長 Benjamin West の個人所蔵美術品を見る機会があった。その時の印象を弟のジョージとトマスに、鋭い観察をまじえながら次のように書き送った。⁽⁶⁾

「金曜の夕べは、ウエルズと過し、翌朝『屍馬に乗った死神⁽⁷⁾』を見にゆきました。ウエストの年令を考えれば、よい出来の絵です。しかしそこには強烈なものは何もなく、接吻したくてたまらなく感ずる女も、真に迫る顔は一つもないのです。すべての芸術の卓越性は、その強烈さにあり、美と真理の密接な関わりの中に、あらゆる不快なものを蒸発させるのです。「リヤ王」を調べてごらん下さい。全体を通じてこのことが例証されていることが分るでしょう。しかし、この絵には不快さがあり、それに対する嫌悪感を葬るような切実な思索の深みがありません。」

(I spent Friday evening with Wells, and went next morning to see "Death on a Pale Horse." It is a wonderful picture, when West's age is considered; but there is nothing to be intense upon, no woman one feels mad to kiss, no face swelling into reality. The excellence of every art is its intensity capable of making all disagreeable evaporate from their being in close relation with Beauty and Truth. Examine "King Lear," and one will find this exemplified throughout;

but in this picture we have unpleasantness without any momentous depth of speculation excited, in which to bury its repulsiveness.)

芸術における醜の問題全体に、すばらしく鋭い光をあてたこの一節につき、Sidney Colvin⁽⁸⁾は、（筆者が下線を施した部分を指し）論文にも値する文章であり、芸術と自然との関係を考える全ての人々に大いに参考になる旨をのべている。Colvinはキーツに対し少し甘い点数を与えすぎる批評家であるから、幾分割引して考えねばならぬが、しかし、ここには、苦痛や醜の美学論のみごとな序論を見ることが出来る。

では醜なるもの、悪なるものから、どのようにして「美」をつくり出すことが出来るであろうか。キーツにはこれに関する言及がある。Colvinはあまりこの理論を評価せず、単に、キーツの感想文にすぎぬとしているが、簡単な表現の中に貴重な芸術論をみることが出来る。しかも直感的に知覚することは「美」であるという、キーツの大きな理論とみごとに一致することには注目せざるをえない。以下に、その一節を引用し、この稿を終りにしたい。

「たとえどんなにいとわしいテーマであれ、それを取り上げ、十分に強力で普遍的な生命と、強烈な想像的思考と洞察に輝く真理をもつ芸術形態に表現してごらん下さい。そうすれば、不快なものは消え去ってしまいます。（中略）人が目に見るものは人生の幻影にすぎません。魂の高まりが起り、それにより人は瞬間的に、時間と空間の偶然的出来ごとからはなれるのです。生命感にあふれる真理の輝きを欠く時には、芸術作品にあらわれた不快な対象は、あくまでも不快で醜である。（Take any subject, however repulsive, and represent it in an art form with enough vigorous universal life—truth gleaming through to excite intense imaginative speculation and insight, and the unpleasantness vanishes.—what one sees is a vision of life,

and there comes an elevation of soul that carries one for the moment away from the accidents of time and space. But that gleam of vitalized truth lacking, a repulsive object represent in art is—repulsive and ugly.)

注(1) B. I. Evans : *Keats* (Great Lives) Duckworth 1934.

(2) Mathew Arnold : *Essays In Criticism*

(3) Letter to R. Woodhouse 27 Oct. 1818.

(4) Letter to F. Brawne ? Feb. 1820.

(5) C. D. Thorpe : *The Mind of John Keats* (1964. 版)

(6) Letter to George and Thomas Keats 21 Dec. 1817.

(7) B. West の描いた絵の名。

(8) Sidney Colvin : *Keats* (ST Martin Press, 1968年版による。初版は1887年)

参 考 文 献 (注で扱ったものを除く主なもの)

(1) W. J. Bate : *John Keats* (Harvard U. P. 1964)

(2) J. M. Murry : *Keats And Shakespeare* (Oxford U. P. 1964)

(3) J. Benziger : *Images of Eternity* (South Illinois U. P. 1964)

(4) Robert Gittings : *John Keats* (Heinemann, 1968)

(5) Aileen Ward : *John Keats* (Secker, 1963)

(6) Walter H. Evert : *Aesthetic And Myth In The Poetry Of Keats* (Princeton U. P. 1965)

(7) Timothy Hilton : *Keats and his world* (Thames and Hudson. 1971)

(8) Starick : *Die Belesenheit von John Keats und die Grundzüge Seiner Literarischen Kritik* (Mayer & Müller 1960)

(9) S. Geest : *Der Sensualismus bei J. Keats* (Breisgan, 1908)

(10) 佐藤清「キーツの芸術」(研究社, 絶版)

(11) 同「キーツ研究」(英詩研究社, 現在は南雲堂出版で刊行)

(12) 日夏耿之介「美の司祭」(三省堂, 絶版)

(12) 松浦暢“*Keats' Sonnet*”(吾妻書房)

(14) 同「キーツの手紙」(同)

(15) 園 頼三「美の探求」創元社

(16) 竹田敏雄「美学事典」弘文堂